



日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 3 号 / Boletín Núm. 3

2001 年 12 月 1 日 / 1 de diciembre de 2001

事務局

〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9

日本学会事務センター

Tel: 03-5814-5801 Fax: 03-5814-5820

ホームページ: <http://www.nanzan-u.ac.jp/HISPANIA/>

編集局

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6

京都外国語大学イスパニア語学科(坂東研究室)

Tel: 075-322-6121 Fax: 075-322-6246

創設当時の思い出 (中)

原 誠 (拓殖大学)

「創設当時の思い出 (上)」はほとんど全文を前置きのために費やしてしまったが、その意味でも今回は直ちに本論に入らねばならない。(上)にも書いたように、第 1 回創立大会は 1955 年 12 月 4 日 (日) に開催された。実に寒い日であった。今でこそ東京外国語大学は都下府中市朝日町に立派な校舎が建っているが、当時は北区西ヶ原の旧海軍火薬庫の跡地に、大規模な台風だったら一遍に吹っ飛ばかねないお粗末な木造校舎が建っていた。その他に、後にコの字形になりはしたものの、当時はほんの一部しか建っていなかった鉄筋コンクリートの 1 号館がせめてもの慰めという形で色を添えていた。筆者は当時 4 年生で、後に共同通信社で活躍した故栗原人雄君と二人で 1 号館の入口の吹きっさらしの場所で受付をやっていた。会田由ゼミに加わっていた 3 名のうちの 2 名である。そこで参加者 (合計 44 名) 全員に名前を書いていただき、年会費 1000 円也 一後に天理大学での第 4 回大会の時、当時ご健在の瀬田栄之助氏に「原さん、会費 1000 円は高いですよ」と言われてしまったが、入会直後の一平会員の筆者にはどうにもお答えのしようがなかった— と昼食代とを頂戴するのが我々二人に課せられた仕事であった。敗戦からまだ 10 年しか経っていなかったから、1000 円の会費が払えず、200 円だけお支払いになった会員もいたことは筆者の記憶に新しい。日本ももう一度あのような物質的・経済的困窮の中に身を置いた方がかえって文化的レベルが上がるような気がしないでもない。

さて学会の午前中の議事は会則の決定と役員選出の二つであった。筆者は受付係だったし、もちろん正会員でもなかったから、これについては手元の「学会ニュース No. 1」に頼らざるをえない。会則自体はこの時決められたものがほとんどそのまま現在でも通用しているように思う。その後変わったとすれば、年会費の金額とか理事の選出方法とかだけで、それすらも会則の中に明記されているわけではない。今から約 50 年前に決められた会則がいかに偉大であったかということである。役員選出については、これはもうそれこそ「学会ニュース No. 1」

の丸写しをするしかない。

会長 永田寛定

副会長 佐藤久平

理事 笠井鎮夫、諸橋宏、大谷弥七、大林多吉、古川武司、渡部登、水谷清、
国沢慶一、会田由、武内恒次、高橋正武、J. ムニョス、
J. L. アルバレス

監事 田中辰之助、横田一太郎

なお発効したばかりの会則の規定に従って理事の互選により理事長には笠井鎮夫氏が選ばれた。当時としてはこれ以上は考えられないベスト・メンバーである。しかし、当然と言えば当然だが、残念なことに、これらのメンバーのうち現在ご存命の方は一人もいらっしやらない。とくに佐藤副会長などは、この時すでに健康がすぐれず、大会に欠席され、その後間もなく他界された。これら役員の方々のお名前に接し、お顔を思い出すとついつい感傷的になるのは筆者の年齢のせいなのであろうか。今はただ山田善郎前会長、荒井正道元理事、長南実元理事長、吉田秀太郎元理事、桑名一博現会長、林屋栄吉現副会長のご長命を切に願って止まない。

とにかくめでたく午前の設立総会は終わった。昼食は、我々学生が健チャン食堂と呼んでいた別棟で参加者全員が健チャンこと、小池健三氏の手になるカレーライスをとった。1955年のことであるから我々日本人は皆この程度の粗食に甘んじていたのである。すでに受付の仕事を終えていた我々二人も昼食をご馳走になった。その席上おそらくは笠井理事長の発案であっただろう、会員全員が一人ひとり立って自己紹介をしておられたのを覚えている。

午後は研究発表が行われた。それらは発表順に、

町田俊昭：現代スペイン語における与格の機能について

大島正：ベルナル・ディアスとメキシコ征服

会田由：ロマンセについて

の三つであった。我々受付係の学生二人も午後は仕事がなく、これら三つの発表を聞かせてもらったが、栗原君はどうだったか知らないが、少なくとも筆者には大なる学問的刺激となった。我が恩師会田由氏は「俺が発表するのは、若い連中に、俺でも勉強をしているのだぞというところを見せたいからだ」と言っておられたが、こういう先生の姿勢は筆者には少なからず刺激になった。それが証拠に、1957年秋大阪外国語大学で行われた第3回大会で筆者も拙い発表をやらせてもらったが、そこには明らかに「我が師に続け」という意図が秘められていたと今になって筆者は思う。大学の教師たる者、こういう態度で後につく者を引っ張っていく義務があると思うのだが、筆者などは結果的には反面教師にかなりえなかつたようで、実にお恥ずかしく思う。

今筆者の手元に、「会報 第1輯」と銘打った雑誌がある。これが後の「イスパニカ」の第1号に相当するものである。「イスパニカ」と改名したのは第2号からで、第2号以降長く編集を担当された荒井正道氏の命名によるものである。初期の原稿編集といい、雑誌の名称といい、荒井氏の功績大なるものがある。さてその「会報 第1輯」には永田会長の「二つの諺」と題する巻頭言のほか、町田氏と大島氏の口頭発表が文章化されて載っている。また最後には瓜谷良平氏の編集後記が出ている。永田氏の巻頭言は、今でも立派に通用するようなスペイン語研究の基本原則 ―データを沢山集め、純帰納的な行き方をとる― が推奨されてい

て、筆者は本稿を書くためにそれを読み直して舌を巻いた。ついでながら（上）で、永田氏のご存命であれば「イスパニヤ学会」への改称に反対されたかもしれない」と書いたが、これは筆者の誤りであった。同氏は、「イスパニヤ語に関する研究は、音声学ないし言語学の面からする基本的な研究のほかに、文学、法律、外交、貿易、農業、工業、などの実用面からも、逆にイスパニヤ語そのものを規制する通則が発見され、そして報告されることを期待します。」（p. 3）と書いておられたのである。

町田氏の論文はスペイン語の与格の諸用法を、英、独、仏、伊、露、中といった諸語の与格のそれと比較・対照しながら、論じたもの。

大島氏のそれは、ベルナル・ディアスの生涯と、その著『ヌエバ・エスパーニヤ征服と真相』とについて簡潔に論じたもの。

会田氏の発表は、スペイン文学史上に重要な地位を占めるロマンセについてそれを研究する必要性を強調したものであった。

いずれも何らかの文献に当たってその主張をまとめて報告したもので、他説を批判して自説を展開するといった類いのオリジナリティーに富んだものとは言えなかったが、1955 年という時期と第 1 回の大会という点を考慮すれば上々の出来だったと言えるのではなからうか。永田氏が会田氏の発表を酷評されたと後でどなたかにうかがったが、もっと甘い点をつけて然るべきである。以上で（中）を終えるが、最後に、拙稿の読者には興味がないかもしれないが筆者にとっては大切な思い出をつけ加えておく。すなわち我々受付を努めた学生二人は、宮城昇氏からアルバイト代として各自金 200 円也を頂戴した。当時の 200 円の出のあることと言ったら。（つづく）

【学会紹介】

関西スペイン語学研究会

機関誌編集担当 福畠 教隆

この研究会は、関西在住のスペイン語学研究者の意見交換の場として今から四半世紀以上も前に発足した。当初は数名の有志が月に 1 度集う、小ぢんまりした談話会だったが、今では関西以外にも広く会員を持ち、逐次刊行物も活発に出版する研究会へと発展した。スペイン語での名称は、Círculo de Lingüística Hispánica de Kansai である。

当研究会が関与する活動は、①月例研究会、②年次セミナー、③機関誌類の発行の 3 種に分けられる。まず月例研究会は、会の発足当時からの中心的活動である。第 1 回は 1974 年 8 月 18 日に大阪外国語大学で開かれ、宮本正美現神戸市外国語大学教授が「余剰代名詞構文について」と題する発表を行った。その後、この活動は途切れることなく、2001 年 9 月 30 日に催された第 249 回例会（高橋覚二南山大学教授「欲求表現について」）に至っている。発表の途中でも参加者が自由に発言できるフランクな雰囲気を持ち味である。Ignacio Bosque マドリー

ド・コンプルテンセ大学教授、Violeta Demonte マドリード自治大学教授、Emma Martinell バルセロナ大学教授などの発表も行われた。またスペイン語ばかりでなく、関連言語に関する発表もある。

次に年次セミナーは、1981年から実施された。その数年前から、東京や愛知のスペイン語学研究会と年に1~2度、合同研究会を開くようになっていたが、それを2泊3日の合宿の形にし、統一テーマを決めて、心ゆくまで討議しようという趣旨である。第1回は1981年7月26~28日に、関西地区大学セミナーハウス(神戸市)で「動詞の法」というテーマで、17名の参加者を集めて開催された。当研究会が発議をしたということで、このセミナーは「関西スペイン語学セミナー (Seminario de Lingüística Española de Kansai、略称 SELEK)」と名づけられたが、運営母体が全国化したため、1996年の16回大会以降は de Kansai という形容を除き、略称 SELE という集まりへと発展的解消した。最新の大会は2001年8月24~26日に上智軽井沢セミナーハウスで開かれた SELE 2001 である。参加者は45名、テーマは「日本語との対照研究」だった。

第3に、機関誌 *Lingüística Hispánica* を1978年の第1号より毎年刊行して、2000年の第23号に至っている。研究論文及び年次活動報告が掲載されている。使用言語は原則としてスペイン語である。第9号(1986年)は、当会発足に尽力された山田善郎前日本イスパニヤ学会会長記念号であった。現在では日本国内は無論のこと、海外の諸研究施設にもバックナンバーが備えられ、広く利用されている。発行にあたってスペイン大使館の援助を受けている。

このように当研究会が及ばずながらスペイン語学に貢献しようという努力を続けて来られたのは、会員の熱意もさることながら、周囲の方々の支えによるところが大きい。記して謝する次第である。

スペイン現代史学会

狩野 美智子

先づ雑誌のことから。「スペイン現代史」創刊号の発行は、1983年10月25日ですから、この会は実に20年近くの歴史を持っているわけです。発行者は「法政大学スペイン現代史研究会」となっています。この学会は、そもそも法政大学で川成先生が「スペイン戦争研究」のゼミ生の研鑽の場として出発したのです。そこに同志が集まり、自ら弟子と名乗る人々が馳せ参じ、一つの面白い学会に成長していったのです。

面白いというのは、論文、研究ノート、学会だより、という固いものから、エッセイ、詩、旅行記、読書感想、書評等、いささかでもスペインに関係があれば、どういう形でも OK という柔軟さのせいでしょうか、実はこの雑誌、「執筆費」というのを出さなければならないのです。会費だけでは足りませんので(それでも足りなくて川成先生が広告集めに苦勞されるのですが)、「僕たちの雑誌なんだから、書きたいことを書こうよ」という川成式スタンス。今年13号が出ましたが、今までに、「ジャック・白井特集」、「ジョージ・オーウェル特集」、「ス

ペイン内戦と現代シンポジウム」、「バスク特集」、「カタルーニャ」、「スペイン内戦 60 周年記念イベント」等々等。

会員になる資格はたった一つ。「スペイン、あるいはスペイン現代史に興味、関心をお持ちの方」というものです。会員数は約百人。北は北海道から南は大阪府まで、更にスペイン、ドイツにもまたがっています。

研究会も時々行います。これもあまり固くるしくなく、しかも面白いのが特長でしょう。20 世紀最後の研究会では、渡部哲郎先生の「バスクの現状」でした。21 世紀最初の研究会は、10 月 13 日に開催の予定ですが、それぞれの専門分野のお話は、とても興味深く、今から楽しみです。そして、実はそのあと一杯飲む、その会費が実に安い、2000 円を越えたことがなく、その上学割まであります。

実は、事務局を背負っている島田顕さんが、モスクワに数年の間行ってしまう、事務局手薄で何となくしょんぼりしていたのですが、この春帰国され、以前にも増して、この学会のために働いて下さることになりました。「スペイン現代史」誌も、研究会も、もっと充実させることができると思います。雑誌の他に、時々「スペイン通信」を出しているのですが、先日発行したものは島田さん帰国の最初の仕事として、内容の充実した出来で、しかも表紙はカラー、とてもご好評をいただきました。今後も随時発行できるでしょう。

というわけで、「スペイン現代史学会」は、充実しつつ存続し続ける、スペインが好きな人、スペインを学ぼうとする人たちのために、いつも大きく門を開けている、そういう会であり続けていきたいと思っています。

「スペイン現代史学会」会長 川成洋
事務局 〒184-8584 東京都小金井市梶野町 3-7-2 法政大学工学部 W2005
川成洋研究室

すべての連絡・問い合わせ先

川成洋
島田顕

クレオール語合同国際会議

荻原 寛（長崎県立大学）

2001 年 6 月 26 日から 29 日にかけての 4 日間、ポルトガルのコインブラ大学で、ふたつのクレオール語学会が連続して開かれた。前半は The Society for Pidgin and Creole Languages (S.P.C.L.) によるもので、参加国はアメリカ、イギリス、イタリア、オーストラリア、オランダ、ガーナ、カナダ、ドイツ、フィリピン、フィンランド、フランスなど 20 カ国、発表者は 45 名であった。後半は Associação:Crioulos de Base Lexical Portuguesa e Espanhola (A.C.B.L.P.E) によるもので、パンフレットに国名が明記されていないので正確な参加国数は不明であるが、アメリカ、コロンビア、スイス、スリランカ、ナイジェリア、フィ

ンランド、ブラジル、ポルトガルなどであった。研究対象地域が限定されているせいか、発表者は日本からただひとり参加した私を含めて 30 名と、S.P.C.L に比べて少なかったが、スペインからの発表者がひとりもいなかったのは何とも妙であった。

この国際学会に参加したきっかけは、大学の研究室宛てに舞い込んだ一通の手紙であった。差出人の名は今回の主催者代表である John Holm 氏。一瞬わが目を疑った。J. Holm 氏といえば斯界の碩学、大御所である。私ごとき無名の研究者に自ら招待状を送って来るとは考えられない。しかし、文面を読み進むうちに疑問は氷解した。昨年、J. Holm 氏と John M. Lipski 氏がアテネオ・デ・マニラ大学でフィリピン人のスペイン語系クレオール（俗称チャバカノ）について講演を行った際、カビテ市の研究家グループがお二人に私のことを話して下さったのである。地元の人々の思わぬ厚情がうれしかった。

フィリピンのスペイン語系クレオールに関する研究発表は、両学会を通して 4 本であった。ただし、私を除く 3 本はマニラ湾に面したカビテではなく、ミンダナオ島西端部に位置するサンボアングのチャバカノについてであった。まず S.P.C.L で、ハワイ大学の Michael L. Forman 氏が、“Serial Verbs Constructions Among the Zamboangueno Verb Chains?”の演題で、基層言語にもない連続動詞（日本語の補助動詞もその一種と言える）の構造が観察される点を、とくに puede を核とする構文に絞り込んで指摘した。また、アテネオ・デ・サンボアング大学の Lojean Valles-Akil 女史は、“The Austronesian Influence on Chabacano Syntax”の演題で、タガログ語やセブ語など 5 つの土着言語の格標識とチャバカノの名詞マーカーを比較し、マーカーが付随する度合いではタガログ語に最も近いと指摘した。続いて A.C.B.L.P.E で、ヘルシンキ大学の Angela Bartens 女史が、“Current Trends in Chabacano and in the Chabacano-Speaking Community”の演題で、ひとりの発話内に英語へのランゲージ・シフトがどの程度行われているか、タガログ語語彙や語法の混ざった Taglish と比較しつつ、主にサンボアングのチャバカノについて調査結果を報告した。最後に、私が“Aparición del sustrato en el predicado del caviteño”という演題で、チャバカノの TMA に限って言えば、スペイン語ではなく主にタガログ語をベースにしている点を指摘した。

ところで、S.P.C.L の発表での使用言語は英語、A.C.B.L.P.E では英語の他にスペイン語、ポルトガル語、フランス語のいずれかに限定されていたが、参加者自身、実に見事にランゲージ・シフトを行っていたのには驚いた。どの言語に切り替えようとまるで淀みないのである。どうにかスペイン語を使い、辛うじて英語の質疑応答に対処していた私は、ただただ舌を巻くばかりであった。

Sobre el XII Congreso Internacional de ASELE

María Paz Cardona
(Universidad Provincial de Aichi)

Con el tema "Tecnologías de la información y de las comunicaciones en la enseñanza de E/LE" se celebró este congreso en la Universidad Politécnica de Valencia, del 5 al 8 de septiembre. Contó con la participación de 130 personas procedentes de 14 países.

Las noventa y seis comunicaciones y seis seminarios que se presentaron en torno al tema reflejaban distintos intentos de profesores e investigadores de enseñanza de español, siguiendo las nuevas tecnologías que ofrece internet, la enseñanza virtual y el uso de métodos multimedia.

En el "Discurso de apertura" se constató el aumento de la importancia del español en el mundo y el crecimiento de intercambio entre los que aprenden. La conferencia de D. Guillermo Rojo, de la Universidad de Santiago de Compostela, sobre "La lingüística basada en el análisis del corpus y el estudio del español" hizo especial referencia al corpus electrónico, que permite una mayor explotación. La conferencia plenaria de D. Joaquín Llisterri, del Departamento de Filología Española de la Universidad Autónoma de Barcelona, sobre "Lengua española, español lengua extranjera y tecnologías lingüísticas" ofreció distintas herramientas de análisis de texto así como tecnologías del habla. En la mesa redonda con la participación de Gerardo Arrarte (Instituto Cervantes de Madrid), Germán Ruipérez (UNED), Rosalie Sitman (Universidad de Tel Aviv) y Antonio Martínez (Instituto Cervantes de Nueva York), se hizo alusión a la necesidad de un cambio de mentalidad en los profesores y de formación específica para asumir los avances tecnológicos. Se reconoció que la enseñanza virtual ha conseguido disminuir la diferencia entre enseñanza presencial y enseñanza a distancia, pero internet no puede suplir a los profesores. La comunicación humana es más amplia.

Los asistentes pudimos beneficiarnos además de las últimas novedades de distintas editoriales. La ciudad de Valencia nos acogió con un paseo turístico por el casco antiguo, con un vino de honor, con una visita a la Cuidad de las Artes y de las Ciencias y con una cena de clausura en el Anillo Perimetral de L'Hemisfèric.

Tras el Congreso nos quedamos con la certeza de haber dado un paso más en formación e información sobre las posibilidades de la enseñanza virtual y las nuevas técnicas de la comunicación. El campo es muy amplio para que cada uno pueda seguir formándose y ofreciendo sin miedo sus pequeños descubrimientos para la enseñanza del español.

第 47 回大会報告

於天理大学

2001 年度第 47 回大会は下記の要領で開催されました。

日時：10 月 27 日（土）～28 日（日）

総会：

研究発表（27 日）

《言語》 司会：宮本 正美

- (1) 橋本 和美：「迂言法 *tener + participio* の分類 — 『スペイン語記述文法』における考察をめぐって—」
- (2) 岡見 友里江：「*La construcción resultativa desde un punto de vista causativo*」
- (3) 高橋 覚二：「スペイン語の欲求表現について」

司会：福蔭 教隆

- (1) 和佐 敦子：「＜傾き＞を持つ疑問文 ¿Acaso…?」
- (2) 瓜谷 望：「連体修飾語である前置詞句の無冠詞用法 一名詞句 [N + d e + N] が所属関係を有するとき—」
- (3) 小池 和良：「*Sustantivos ‘ligeros’*」

《文学》 司会：杉山 晃

- (1) Arsenio Sanz Rivera：「*Contar un cuento en clase*」
- (2) Puebla Ceferino：「*Ecología y progreso en ‘Los santos inocentes’, de Delibes*」

司会：堀内 研二

- (1) 大楠 栄三：「作中人物導入の手法：二重の未知とその変容 —十九世紀スペイン小説において—」
- (2) 太田 靖子：「ホセ・ファン・タブラーダの《日本趣味》の詩についての一考察」

《文化》 司会：小林 一宏

- (1) 中本 香：「16 世紀セゴビア市における毛織物業」
- (2) 水戸 博之：「名古屋大学附属図書館所蔵スペイン市民戦争関係図書について」

司会：坂東 省次

- (1) Darío González：「*Música y danzas tradicionales de Los Andes*」
- (2) 須本 雅子：「¿Cubanización o globalización?」

研究発表 (28 日)

《言語》 司会：高橋 覚二

- (1) 村上 陽子：「ボゴタの教養語アングリシスモの性」
- (2) Francisco Jesús Fernández： “El servicio de información sobre la lengua”
- (3) 三好 準之助：「DRAE Escolar の americanismos について」

司会：本田 誠二

- (1) 寺崎 英樹：「アルフォンソ 10 世『イスパニア史』における RA 形の用法について」
- (2) 原 誠：「スペイン語創出文法理論の文意味部門に C 階層はあるか？」

《文学》 司会：有本 紀明

/課題別発表 I/ [『ドン・キホーテ』を読む]

- (1) 斎藤 文子：「『ドン・キホーテ』のなかの読者・騎士道物語及び前編をだれが読んでいるのか」
- (2) 片倉 充造：「『ドン・キホーテ』における「現実」と「フィクション」の関係性」

司会：佐竹 謙一

- (1) 稲本 健二：「ロペ・デ・ベガによる推敲」

《文化/芸術》 司会：野谷 文昭

/課題別発表 II/ [ブニュエル、ロルカ、ダリ 27 年代の芸術表現]

- (1) Glenn Ismael Benavides Pérez： “Imaginería de ‘la muerte’ en Buñuel durante su período surrealista —Aportaciones de Dalí y Lorca”
- (2) 近藤 豊：「イエルマについて」
- (3) José Luis Velasco： “Salvador Dalí y el surrealismo”

《文化/思想》 司会：木下 登

/課題別発表 III/ [黄金世紀の文献学]

- (1) 野村 竜仁： “El Crotalón y cuestiones epistemológicas de la literatura erasmista”
- (2) 岡本 信照：「黄金世紀における俗語文法出現の意義 —ネブリハとコレアスの比較を通じて—」

特別講演

フアン・レニャ駐日スペイン大使： “España presidiendo la Unión Europea —Relaciones con Japón” (E.U.の議長国となるスペインと日本の関係)

2001 年度第 2 回理事会

2001 年度理事会は下記の要領で開催されました。

日時：9 月 23 日 13:00～15:15

場所：モンブランホテル（名古屋駅前）

1. 前回議事録（2001. 5. 13）を承認。
2. 審議事項
 - (1) 会員 3 名と賛助会員 1 名の退会および新入会員 7 名を承認。
 - (2) 2002 年度第 48 回大会の会場校を東京外国語大学に決定。
 - (3) 2001 年度第 47 回大会（於天理大学）プログラムを決定。
 - (4) 理事数の削減および、これに関連する会則改定案について審議。
 - (5) 学会誌のバックナンバーの扱いについて審議。

2001 年度役員一覧

1. 会 長 桑名一博
2. 副会長 林屋永吉
3. 理事長 小林一宏
4. 理 事 東日本（ABC 順） *原 誠 小林一宏
*本田誠二 小池和良
*野谷文昭 杉山 晃
*高山智博 高垣敏博
*上田博人 牛島信明
西日本（ABC 順） *有本紀明 堀内研二
*坂東省次 伊藤太吾
*出口厚美 宮本正美
*福寫教隆 高橋覚二
*木下 登 （欠員）
*は 2000 年度選出理事
5. 会計 小池和良
6. 監査 藤田一成 長谷川信弥
7. 庶務 近藤 豊（大会担当） 三角明子（理事長任命）
8. 学会誌編集委員会
文学： 有本紀明 *野谷文昭
言語： 福寫教隆 上田博人
文化： 木下 登 大高保二郎
9. 広報委員会
坂東省次 木下 登 *高橋覚二
*は委員長

日本イスパニヤ学会第 47 回大会（於天理大学） 会計報告

理事会昼食（27 日）	40,000（2,000 円×20）
大会組織委員・アルバイト学生昼食（27 日）	15,000（1,000 円×15）
休憩室用雑貨 （コーヒー、紅茶、緑茶砂糖、 クリープ、スプーン、紙コップ、菓子）	15,417
書類コピー代 （総会書類、発表者レジュメ 追加分、プログラム印刷）	39,850
返信はがき代	20,000（50 円×400）
はがき印刷代	15,330
講演者への贈呈花束	5,250
講演会録画・録音テープ	1,946（ビデオテープ 1,242 円＋録音テープ 612 円＋消費税 92 円）
学会印送料	740
領収証（×2 冊）	252
学生アルバイト （157 時間の内訳：学生 A: 26、学生 B: 26、 学生 C: 14、学生 D: 14、学生 E: 14、学生 F: 7、 学生 G: 7、学生 H: 7、学生 I: 7、学生 J: 7、 学生 K: 7、学生 L: 7、学生 M: 7、学生 N: 7）	78,500（時給 500 円×のべ時 間 157）
スペイン大使往復旅費	38,230
支出総額	270,515

2001年3月31日決算

日本イスパニヤ学会
2000年度会計報告

2001年10月27日

2000年4月1日～2001年3月31日

収入(単位は円)

支出(単位は円)

正会員会費	2,818,550
賛助会員会費	165,000
BACK NO 収入	22,800
銀行預金利子	604
1999年度よりの繰越金	1,355,832

センター事務経費	516,899
センター業務委託費	344,746
学会誌・会報発行費用	766,238
大会開催費用	272,490
会議開催費	56,176
通信・交通費	143,760
手数料	2,205
庶務委員経費	60,000
イスパニカ保管料	78,120
ロゴマークの賞金	50,000

収入合計 4,362,786

支出合計 2,290,634

現在残高(収入-支出)

2,072,152

会計委員 小池和良

監査の結果、異常なきものと認めます。

2001年9月20日

監査委員 藤田一成

2001年8月23日

監査委員 長谷川信弥

現在残高内訳	単位は円
学会事務センター預り金	1091,631
三和銀行普通預金	933,428
現金	47,093
	2,072,152

2001年10月27日

日本イスパニヤ学会
2002年度会計予算案

収入

会費 (8000円×370名) 2,960,000円

支出

(2000年度の数字)

1. イスパニカ・会報発行経費	1,100,000円	(766,238円)
2. 大会開催費用	300,000円	(272,490円)
3. 学会事務センター業務委託費用	400,000円	(344,746円)
4. 学会事務センター事務経費	500,000円	(516,899円)
5. 庶務委員経費	60,000円	(60,000円)
6. 理事会開催費用	60,000円	(56,176円)
7. 保管料	80,000円	(78,120円)
8. 通信・交通費	150,000円	(143,760円)
9. その他	50,000円	(52,205円)

合計 2,700,000円 (2,290,634円)

収支差額 260,000円

注1. 学会事務センター事務経費：会費請求書・会報/イスパニカ等の郵送料・コピー代・事務通信費等.

注2. 通信・交通費：理事会開催に伴う庶務委員の交通費/編集作業に伴う郵便料金・事務センターに依頼しない郵便料金.

注3. その他：コピー代・送金手数料・消耗品等.

作成
会計委員 小池和良

【新刊紹介】

マヌエル・リバス著 『蝶の舌』（野谷文昭・熊倉靖子 訳 角川書店 2001年7月）

映画『蝶の舌』は日本でロングランとなったが、映画を先に見てから、同名のこの短編集を手にした人は、多少の違和感があったのではないか。スクリーンいっぱいにあふれる水々しい緑の森や、冷たくきらめく川も、素朴な村人も、本書に収められた十六編のうちのごく一部の世界にすぎない。本書では、公開された映画にあわせ、十六編のオリジナルの配列を変えて、映画に使われた三編が冒頭にまとめておかれ、また全体のタイトルも、原作の『愛よ、僕にどうしろと？』から、映画に使われた一編のそれに变えてある。しかしこの短編集は、あの美しい映画のウェットな叙情性とはまったく異なる面をもっている。

リバスは、消費文化の産物にかこまれた日常生活にふとしのび込む不安感を、さらりとした文体ですくい取ることに、巧みである。冷蔵庫があつて、ピザを食べ、テレビがあつて、お気に入りのアニメ・キャラクターがいて、ハリウッド映画の話題作が引き合いに出される日常。そこには、耳にピアスを六個つけてヤマハのバイクに乗る青年や、テレビの世界と現実を混同している一人暮らしの老女、『ホーム・アローン』の主人公のような、ひねたいたずら少年がいる。

たとえば「そこに独りで」という一編。エアロスミスのスティーヴン・タイラーの巨大ポスターを部屋に貼り、ハード・ロック・バンドを組み、電動ノコギリで手足を切るビデオを友人たちとピザを食べながら見たりしている息子が、朝になっても帰宅しない。心配する妻をおいて、下着の卸のセールスマンである夫は仕事に出かける。販売の競争相手を意識しながらランジェリー・ショップを車で回っていると、家に電話をすることも忘れてしまう。夕方仕事が終わって連絡をとると、息子は無事に帰ってきている。町はずれのトンネルの中で独りで夜を明かしたのだと聞かされる。独りぼっちで夜を過ごした息子の姿が父の脳裏に浮かぶ。途中のガソリンスタンドでふと買ってしまったエアロスミスのカセットテープを、帰りの車の中で繰り返し聞きながら、息子にプレゼントしようとする、というのがあらずじである。事件らしい事件はなにも起こらない。父は、息子の一晩だけの失踪をきっかけに、これまで何を考えているのかさっぱり理解できなかった息子に、少しだけ近づけたような気がするのである。

特大大きな事件が起きるわけでもない、平凡な日常を簡潔な言葉で切り取ってきて、なにか真実（らしきもの）を表そうとするやり方は、たとえばミニマリストの旗手と言われるレイモンド・カーヴァーの世界に通ずる。一方、死んだ男が、スーパーで働く女の子との淡い恋物語を語り、弔問に訪れる人たちの様子を観察するという、まるでルイサ・ボンバルの小説のような状況をコミカルにポップに描いた作品（オリジナルの表題作『愛よ、僕にどうしろと？』）もある。スペインのアメリカーナイズされた日常のひとこまを書くこともできれば、『蝶の舌』のような、市民戦争前後のガリシアを舞台にした友情と裏切りの話も描くといった具合だ。リバスはたいへん器用な作家なのである。

器用であるということは、逆に言えば、リバス独自の世界が見えてこないということでもある。正直なところ、この短編集は私には少々物足りなかった。彼はガリシア文学の革命児と見なされているそう。どういう意味で革命児なのだろうか。

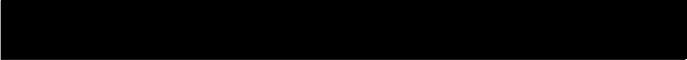
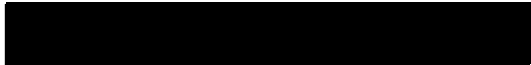
（東京大学大学院総合文化研究科・斎藤文子）

【事務局から】

《会員の異動》

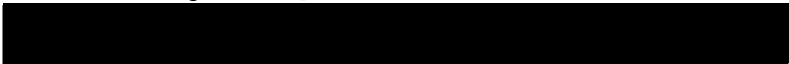
新入会員

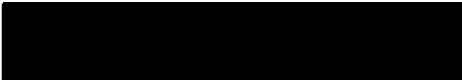
1. BENAVIDES Pérez Glenn (天理大学)
研究テーマ：Literatura hispana y cine

2. 賀数 マリアナ (琉球大学)

3. 松原 典子 (上智大学)
研究テーマ：16・17 世紀のスペイン絵画および美術理論、特にエル・グレコ

4. 杉田 和歌子 (京都外国語大学)
研究テーマ：ホセ・オルテガ・イ・ガセットの言語解釈

5. 岡見 友里江 (明治学院大学一般教育学部)
研究テーマ：スペイン語学、言語学

6. FERNÁNDEZ Francisco
研究テーマ：Lexicografía y dialectología hispanoamericana

7. VARÓN López Arturo (神奈川大学)
研究テーマ：La didáctica del español como lengua extranjera y la lingüística aplicada.

8. VALLS Lluís (立命館大学大学院)
研究テーマ：Cambios en las formas de organización de los actores económicos y en sus relaciones con el estado. Comparación entre Japón y España

9. 保崎 典子 (東京外国語大学大学院)


10. 河崎 佳代（城西国際大学）

研究テーマ：日西対照研究



退会者

安井祐一

【原稿募集】

本誌『会報』の原稿を募集しています。下記のような項目など特に分野は問いません。スペイン語圏に関する原稿をどしどしお寄せください。

- 国内外の学会の案内と報告
- 国内の学術講演会および行事の案内と報告
- スペイン語圏に関する新刊書（和書・洋書）の紹介
- その他

（使用言語：日本語もしくはスペイン語）

（原稿分量：原稿用紙四百字詰 1000～1400 字）

【編集後記】

『会報』3号をお届けいたします。今号は、去る10月27日・28日に天理大学で開催されました日本イスパニヤ学会大47回大会の関係記事を中心に、数多くの情報をお伝えいたしております。ご覧いただければ幸いです。ご承知の通り、「今年」はラファエル・ラペサ博士とマヌエル・アルバル博士の両巨頭が逝去されました。会員の中に両博士の思い出などの記事をご執筆いただける方がおられましたら、本誌に是非ともご寄稿下さい。（坂東省次）